深い学びのために

学習のポイントの解答例

1 **この文章の文体上の特色を、字数や対句などの点からまとめてみよう。**

【答】

字数―八字句や七字句もあるが、四字句と六字句が基調となっている。

対句―合計七組の対句で構成されている。前後の二句が対となる直対のほか、一句を隔てて対を構成する隔句対も用いられている。

▼ポイント▲　本文を句読点で改行しながらノートや原稿用紙に書き写し、字数や対句の構造を概観させる（左図参照）。さらに「参考」の説明を参照しながら、四六駢儷文の特徴を説明する。

（夫）	天地者万物之逆旅	8		（況）	陽春召我以煙景	7	
	光陰者百代之過客	8			大塊假我以文章	7	
（而）	浮生若夢	4	4		会桃李之芳園	6	6
	為歓幾何	4			序天倫之楽事	6	
	古人秉燭夜遊	6					
	良有以也	4					

	群季俊秀	4	4		開瓊筵以坐華	6	6
	皆為恵連	4			飛羽觴而酔月	6	
	吾人詠歌	4	4		不有佳作	4	4
	独慚康楽	4			何伸雅懐	4	
	幽賞未已	4	4		如詩不成	4	4
	高談転清	4			罰依金谷酒数	6	

言葉と表現の解答例

1 **本文中に用いられている比喩表現を抜き出し、その効果について考えてみよう。**

【答】「天地」→「万物之逆旅」、「光陰」→「百代之過客」、「浮生」→「夢」。冒頭の比喩表現によって、文章全体の背景（無限の時空の中で得られたはかない生を楽しむ）を読者に印象づけている。

▼ポイント▲　「天地」「光陰」のように永遠の時空を連想させる語と「逆旅」（旅館）、「過客」（旅人）のように限定された存在を「万物」「百代」という無数をあらわす形容で繋いでいることに注意する。「浮生」は小さな存在に過ぎず、しかも「夢」のようにはかないが、同時に無限の時空を一時的にせよ住みかにしている。ただ生が短いことを嘆くのではなく、天地と歳月の無限を借りて、

いまこの時を楽しもうというこの文章の基調にふさわしい比喩表現と言える。

2　歴史上の人名や地名を本文中から抜き出し、それらが使われている意味について考えてみよう。

【答】（謝）恵連・（謝）康楽（霊運）・金谷（園）。過去のすぐれた文人たちの宴にならうものとして自分たちの宴を位置づけている。

▼ポイント▲　謝霊運は六朝文学を代表する詩人、謝恵連はその族弟（祖父の祖父を同じくする者を族兄弟という）。彼らの出身である陳郡の謝氏は、王導や王羲之など琅邪の王氏と並ぶ名族。金谷園は、西晋の石崇が洛陽近郊に開いた別荘。宴を開いて客人に詩を求め、詩集とした。王羲之「蘭亭集」の先蹤である。李白は、こうした文人たちの世界に憧れ、自らその列に連なることを望んだ。

言語活動の解答例

1　松尾芭蕉（ばしょう）『おくのほそ道』の冒頭部分と比較して、気づいたことを発表してみよう。

【答】李白は文章の冒頭において広大な天地と悠久の時間を提示することで、人間の生のはかなさ短さを浮かび上がらせている。それに対し芭蕉は、もっぱら時間の流れに注目することで年月を永遠の旅人と捉え、旅に生きようとする自分の生涯と重ね合わせている。

▼ポイント▲　芭蕉が時間の流れのみを取り上げている点に注目させたうえで、それが何に例えられているかに気づかせる。

《板書例》

李白：天地（空間）―光陰（時間）
⇔
浮生（はかなく短い生涯）

芭蕉：月日（時間）―行きかふ年（時間）
＝
旅人（生涯を旅に送る自身）

（齋藤　希史）